

曹操政権の形成

渡邊 義浩

はじめに

一、曹操政権論

二、「名士」との出会い

三、徐州大虐殺

四、荀彧の加入と潁川「名士」

おわりに

はじめに

陳壽は、曹操を「非常の人、超世の傑」と絶賛している（『三國志』卷一 武帝紀）。当代きつての文化人であった曹操は、そのサロンから「建安文學」を發達させる文学的才能のほか、養生思想・音楽・草書・囲碁にも通じる万端ぶりを見せた（渡邊一九九五）。中でも、曹操は兵法に優れ、後漢末の乱世を切り開き、曹魏の基礎を作るうえで、その能力は遺憾なく發揮された。しかし、三国随一の軍事能力を持つ曹操も、それだけで曹魏を形成できなかったわけではない。將軍を統御し、官僚層を操縦しなければ、君主権力を打ち立て、安定した支配を行うことはできなかったのである。曹操は、どのような関係を家臣団と結びながら、政権を樹立したのであるか。曹操と家臣団との関係を分析

しついで。

一、曹操政権論

日本における曹操政権論は、川勝義雄の研究を中心に展開してきた。川勝（一九五四）は、曹操とその配下の武将は、任侠的結合関係を有しており、またそれぞれが率いる集団の統合理念も任侠にあつたとし、曹操軍団の任侠的・「私的」結合性に、西欧中世の「私的」な結合関係との類似性を見、その性格に中国中世の特徴を措定しようとしたのである。これに対して五井直弘（一九五六）は、曹操の家臣団を初従形態により分類し、故吏出身者が多いことから、曹操政権の性格を家父長的・私的隷属的であると見、三国は貴族制ではなく、秦漢統一帝国と同質の家父長的・隷属的な支配関係を有する時代であると認識した。一方、好並隆司（一九五七-a）は、曹操政権に故吏出身者の多い理由を、曹操の勢力拡大過程に求め、故吏関係がすでに功利化・形骸化していたことを説いて五井を批判した。これらの研究は、いずれも「世界史の基本法則」を中国史に適用しようとする努力の結果、各人の時代区分に適した特性を曹操政権に求めたものである。ゆえに曹操と家臣団との結合形態に大きな関心が払われたが、人的結合関係を任侠的あるいは隷属的と規定することのみから政権全体の歴史的な位置づけを考えることは難しかった。

内藤湖南（一九二二）以来、曹魏から始まる魏晉南北朝は、貴族制の時代と考えられている。川勝（一九五〇）は、曹操政権の文人官僚に貴族制の源流を見る。後漢末の清流勢力は、儒家的な国家理念を持ち、それに支えられた士大夫の広範な輿論を背景に、相互の連絡と組織を持った一つの統一体として魏晉貴族の母体になったとしたのである。増淵龍夫（一九六〇）は、太学生の清議では儒教的価値規準は名目化・外在化しており、外戚竇武と結ぶような価値規準の自己撞着が存在したと述べ、内在的に儒教的価値規準で自己を律する逸民的人士による清流派への批判を

重視すべきことを説いた。増淵の批判に応えて川勝（一九六七）は、逸民の人士も清流派の外延と考え得るとし、濁流豪族の領主化傾向に対して黨錮の禁から黄巾の乱に及ぶ一連のレジスタンス運動が行われたと自説を展開する。これに対して吉川忠夫（一九六七）は、六朝貴族制社会を切り開いた者は逸民の人士でも黨人でもなく、就くでもなく就かぬでもない生き方をした権道派であり、権道派にこそ貴族制の淵源と典型を求めることができるとし、多田狷介（一九七〇）は、治者である清流士人と被治者である黄巾との間に、一連のレジスタンス運動を設定することに疑義を提出したのである。

これらの批判に対して川勝（一九七〇）は、谷川道雄との共同研究による「豪族共同体」論を導入して、自己の所説を補強、再確認した。中世の主體的形成者である「清流豪族」は、本来的には領主化傾向を持ちながらも、一般民衆の輿論に規制されて大土地所有を否定する自己矛盾的な存在となったものである。「民の望」として「豪族共同体」の指導者となった「清流豪族」は、さらに上位の郷論の支持を受けて全国的な清流グループを形成し、その力量により主體的に曹魏など三国の諸政権を切り開き、中国中世史の形成主体となったのである。川勝義雄・谷川道雄に主導された「豪族共同体」論は、階級を内包する通常の共同体概念と異なり、共同体を階級を超える中国史の形成主体と位置づけるものであった（谷川一九七六）。したがって、共同体の概念に関して、重田徳（一九七一）などから批判が寄せられ、多田（一九七二）は、自己の共同体論を構築するなど、いわゆる「共同体」論争が展開されたのである。

一方、具体的な史料に基づく実証により、川勝説を批判し続けた者が矢野主税である。その集大成である矢野（一九七六—a b）は、川勝の主張する全国的士大夫集団の結成を否定し、曹魏政権に密着し得た者が貴族となり、代々高官を世襲すると共に在地性を失い、国家の俸給に依存する「寄生官僚」になると説く。現象論としては、矢野の主

張どおり、漢と魏の官僚家は非連続であるが、それがそのまま、後漢末に貴族制の淵源を求めることはできないという結論には繋がるまい。堀敏一（一九六八）が、貴族社会独自の秩序が作られた時点に遡ると、後漢末宦官政治に抵抗した清流豪族につきあたると述べるように、個々の貴族の家の連続性ではなく、六朝貴族制独自の秩序の淵源を考えるのであれば、後漢末の黨錮の禁を契機に形成される「黨人」の名声に、それを求めるべきであろう。

貴族の家柄が継続するということは、その本源的な存立理由ではなく結果に過ぎない。貴族の存立基盤は別にある。それを「民の望」に求める川勝説が、後漢末の思想状況の中に貴族制の淵源を置くことは首肯し得るが、貴族が郷論に依存したという際の「郷論」とは、必ずしも「民の望」を意味しない。中村圭爾（一九八二）は、貴族の基盤である「郷論」が現実の郷里社会の「民の望」から乖離していることを指摘する。

こうした研究動向を踏まえ、渡邊義浩（一九九一—b）は、当時の支配層が、一般民衆の「民の望」ではなく、仲間社会内での評価により名声を持つ「名士」と呼ぶべき存在であることを主張し、仲間社会への参入を希望する豪族の「名士」に対する支持に、三国政権が「名士」を必要とした理由を求めた。これに対して堀（一九九六）は、曹操政権に仕えていた「名士」が、政権と接触して変容し、地方名士から王朝貴族へと変貌を遂げたことを主張している。「名士」のあり方と君主権力との関係は、具体的な政治過程の中で解明する必要があるであろう。本稿の目的はここにある。

中国においては、郭沫若（一九五九）による曹操の再評価から論争が始まった。郭は封建的正統主義の観念・曹操と農民叛乱との関連・曹操と豪族との関係・中国統一の四点を中心に曹操を再評価した。これらの諸点をめぐる論争は、『曹操論集』（三聯書店、一九六〇年）にまとめられ、好並（一九七〇）により、その論点は整理されている。しかし、ここでの議論は、曹操が農民の敵か否かといった階級闘争論に終始した感があり、本稿の問題関心と係わる点

は多くはない。また、張大可（一九八八）が総括するように、これ以降の三国時代に関する研究も、曹操・諸葛亮の人物論が過半を占め、政権の構造を掘り下げ、それを理論化するという研究は、少数に過ぎなかった。

万繩楠（一九六四）は、曹魏の政権構造を理論化した数少ない研究の一つであり、曹操と地縁・血縁で結びつき政権の基盤となった「譙沛集團」と、世族地主集團の「汝潁集團」との抗争として曹操政権を把握する。唐長孺（一九八一）も、基本的にはこれを踏襲しながら、曹操集團における潁川出身者の多さの原因を、首都許縣を含む潁川郡の支配の安定と、汝南・潁川両郡に本来的に多かった名士の推挙を曹操が荀彧に促した結果に求める。さらに、袁氏滅亡後に崔琰が中心となって冀州の名士を、劉表の滅亡後に韓嵩が中心となって荊州の名士を、序列をつけながら曹操集團に加入させたことも指摘している。これ以外にも、個別の論点で見べき研究は多いが、政権論としては、基本的にこの線を超えるものは少ないと言えよう。

以上のような曹操政権に関する研究動向を踏まえ、本稿は、曹操が「名士」といかなる関係を取り結んだのかという問題を、具体的な政治過程の中で追求する。その際、政権を樹立した後だけではなく、曹操の挙兵に遡って両者の関係を検討することとし、加えて「清流豪族」論でも「汝潁集團」論でも重視する荀彧加入の意義も考えていきたい。

二、「名士」との出会い

曹操の祖父曹騰は、後漢の外戚梁冀とともに桓帝を擁立した宦官である。中常侍として政権を壟断した曹騰は巨万の富を蓄え、それは夏侯氏から養子に入った曹操の父曹嵩へと受け継がれた。曹嵩はその財力を利用して、中平四（一八七）年に、後漢の最高位である太尉を一億錢で購入し、大司農から昇進している（『後漢書』本紀八 靈帝

紀)。

祖父曹騰の遺産は豊富な財力に止まらない。いわゆる「清」なる官僚との交友関係は、曹操活躍のための人脈を準備した。曹騰は「海内の名士」として、虞放(兗州陳留、司空)・邊韶(兗州陳留、陳國相)・延篤(荊州南陽、京兆尹)・張温(荊州南陽、太尉)・張奐(涼州敦煌、太常)・堂谿典(豫州潁川、五官中郎將)を推挙したほか、廟鬲を高く評価した。のち三公に昇進した廟鬲は、「今身公と爲るは、乃ち曹常侍の力なり」と感謝したという(『後漢書』列傳六十八 宦者 曹騰傳)。また、渡邊(一九八九—a)で指摘したように、延篤は曹騰との交友のほか、宦官州輔の頌徳碑にも名を連ねる。川勝(一九五〇)以来の、宦官・外戚を「濁流」と措定し、「清流豪族」との絶対的な対決の中に後漢後期の政局を描く理解は、その対立面のみを強調した偏頗な見方に過ぎない。曹操は、宦官曹騰が遺した「清」なる官僚との人脈を十分に活用していくのである。

その代表的な事例が橋玄との結びつきである。石井仁(二〇〇〇)が論証するように、曹騰恩顧の人脈は西北の辺境防衛に多く活躍していた。しかも、単なる武将ではなく、門弟に教授するほどの学識を持ちながら、戦場に出れば鮮やかな采配を振るい敵を粉碎する。「入りては相、出ずれば將」、それを見事に体現する者が、曹騰の評価した張奐であり、廟鬲であった。その廟鬲に推挙された者が橋玄である。橋玄は、曹操の最大の理解者、そして庇護者でもあった。『三國志』巻一 武帝紀注引『魏書』に、

太尉の橋玄、世に人を知るに名し。太祖(曹操)を暗て之を異とし、曰く、「吾、天下の名士を見ること多きも、未だ君の若き者有らざるなり。君善く自ら持て。吾老ひたり。願はくば妻子を以て爲に託せん」と。是由り(曹操の)聲名益々重し。

と、橋玄が曹操を評価することにより、曹操は名声を高め「名士」となり得たのである。それだけではない。橋玄は

曹操の理想であった。橋玄は「橋君學」を創始した橋仁の七世孫で、梁國の橋氏は典型的な儒教的官僚の家柄であった。しかし橋玄は、後漢國家の儒教的支配である「寛」治（渡邊一九九四）を取らず、涼州の豪族皇甫氏の汚職を摘発し、我が子の誘拐事件の際には、子もろとも犯人を滅ぼすなどの「猛」政を行った（『後漢書』列傳四十一 橋玄傳）。橋玄は曹操へ期待をかけ、曹操もそれに応えて「入りては相、出ずれば將」となり得る政治家を目指していた。橋玄は曹操に許劭の評価を受けることを勧める。『三國志』卷一 武帝紀注引『世語』に、

（橋）玄、太祖（曹操）に謂ひて曰く、「君未だ名有らず、許子將（許劭）と交はる可し」と。太祖、乃ち子將に造る。子將、焉を納れ、是由り名を知らる。

とある。橋玄が曹操を許劭に紹介したのは、許劭が「名士」の人物評価の中心だからである。図一「後漢末の「名士」と三國政權」に表したように、汝南郡と潁川郡は、陳蕃と李膺を頂点とする「黨人」、さらには「黨人」を淵源とする「名士」の中心地であった。従弟の許靖と毎月異なつた題目で人物評価を行い「月旦評」の言葉を生んだ許劭は、汝南郡の輿論の中核だったのである。

ところで、橋玄は黨錮に坐していない。渡邊（一九九一—a）で述べた如く、「黨人」は、橋玄のように歴代高級官僚を輩出する家柄の者は少なく、政治的地位の相対的に低い豪族層を出自とすることが多かった。その出身地域は、豫州の汝南郡と潁川郡、兗州の山陽郡の三郡が突出し、後漢時代に多く高官を輩出した河南郡・南陽郡の出身者は少数であった。橋玄は、曹操を時代の先端をいく「黨人」の中心地である汝南郡で「名士」にしたかったのである。

ただし、曹操が遜つた態度で懸命に頼んでも、許劭はなかなか評価をしなかった。業を煮やした曹操は、隙をみて許劭を脅かし人物評価を強要する。許劭は仕方なく、「君は清平の姦賊、亂世の英雄なり」と評価をした。曹操は、

大いに喜んで帰ったという（『後漢書』列傳五十八 許劭傳）。曹操が喜んだ理由は評語の内容そのものにはない。許劭の評価を受け、汝南「名士」社会に仲間入りを果たしたことを喜んだのである。図一「後漢末の「名士」と三國政權」に示したように、「名士」は汝南郡と潁川郡を中心に、人物評価や交友関係を軸とする全国的なネットワークを持つていたのである。そこに加入できた意味は大きい。

やがて曹操は汝南を名声の場とする「名士」の中でも活動的な何顛グループに属する。何顛は、廟輯（廟嵩の子）と親しく、曹騰系の人脈と考えてよい。その政治姿勢は「猛」を指向するもので、やがて董卓打倒を目指し命を落とす（『後漢書』列傳五十七 黨錮 何顛傳）。何顛は南陽の郡出身であるが、『三國志』卷十 荀攸傳注引張璠『漢紀』に、

黨事起きるに及び、（何）顛も亦、名其の中に在り。乃ち名姓を變へ、汝南の間に亡匿す。至る所、皆其の豪華と交結す。顛既に太祖（曹操）を奇として荀彧を知る。袁紹之を慕ひ、與に奔走の友と爲る。

とあるように、黨錮の禁の際、汝南郡を転々と亡命しており、汝南「名士」社会を名声の場としていたことが分かる。曹操は、何顛に「奇」と評価され、荀彧や袁紹を知ることになるが、その際、袁紹の地位の高さには留意すべきである。何顛にとつて曹操は、荀彧と同様に評価を下す対象であったが、袁紹とともに「奔走の友」となる間柄なのである。曹操は何顛の下位で、袁紹は何顛と同格であった。「四世三公」の家柄を誇る「汝南の袁氏」は、汝南「名士」社会でも図抜けた存在なのであった（渡邊一九九七）。『三國志』卷一 武帝紀注引皇甫謐『逸士傳』に、

汝南の王儁、字は子文。少くして范滂・許章の識る所と爲る。南陽の岑暉と善し。公（曹操）の布衣爲りし、特に儁を愛す。儁も亦、公を稱して治世の具有りとす。袁紹と弟の術、母を喪ふに及び、汝南に歸葬す。儁、公と之に會し、會する者三萬人。公、外に於て密かに儁に語りて曰く、「天下將に亂れんとす。亂の魁となる者、必ず此の二人

なり。天下を濟ひ、百姓の爲に命を請はんと欲す。先ず此の二子を誅せざれば、亂今作らん」と。儻曰く、「卿の言の如くば、天下を濟ふ者は、卿を舍いて復た誰ぞ」と。相對ひて笑ふ。

とあるように、曹操は汝南「名士」社会の一員として、汝南の王儻と共に袁紹の母の葬儀に参列した。三万人に及ぶ会葬者は、汝南「名士」社会の主人公が袁紹・袁術の「二袁」であったことを示す。曹操はそれを認めながらも、袁紹に対抗することを目指していたのである。

曹操は、橋玄・何顛といった祖父曹騰以来の人脈を活用し、「名士」の中心地である汝南郡の「名士」社会に参入することができた。ただし、汝南「名士」社会では、袁紹の声望が圧倒的に高く、曹操は「名士」の一員に過ぎなかったのである。

三、徐州大虐殺

石井（二〇〇〇）に依れば、曹操は宦官の養子であった王吉により孝廉に挙げられ、洛陽北部尉に任命された。曹操は、犯罪者を捕らえると権力者の係累であるうが、おかまもなく仗殺する「猛」政を行い、頓丘令を経て議郎となつたが、靈帝の宋皇后の廢位に伴い従妹の夫宋奇が誅殺され、連座して免官となる。黄巾の乱が起こると、騎都尉として潁川黄巾の鎮圧に活躍し、濟南國相となつた。ここでも、十縣のうち八縣の令長を収賄の罪で罷免する「猛」政を行い、恨みを買つた曹操は「家禍」をおそれ、郷里の譙縣にひきこもつた。しかし、時代は曹操を埋もれさせない。曹操は、靈帝が新設した常備軍である西園八校尉の典軍校尉として復活した。何進の宦官誅殺、董卓の専横と続く時期には、政局の外に身を置いていた曹操であるが、袁紹を盟主とする反董卓連合には参加する。兗州陳留郡襄邑縣出身の衛茲の家財で募つた兵五千を率いた曹操は、襄邑縣の隣、己吾縣で挙兵した。反董卓連合軍と酸棗で合流す

ると、袁紹から行奮武將軍に推挙されたが、『三國志』卷十二 鮑勛傳注引『魏書』に、時に（袁）紹の衆最も盛んに、豪傑多く之に向かう。（鮑）信、獨り太祖に謂ひて曰く、「夫れ略は世出せず。能く英雄を總べ以て亂を撥め正に反す者は君なり。苟くも其の人に非ざれば、疆きと雖も必ず斃れん。君殆んど天の啓びく所なり」と。遂に深く自ら結納す。太祖も亦、親しみ焉を異とす。

とあるように、諸將の中では袁紹の勢威が強く、曹操に注目する者は少なかった。そうした中で、兗州泰山郡から歩兵二万・騎兵七百を率いて参加していた破虜將軍の鮑信と弟の裨將軍鮑輅だけが、曹操の異才に気づき、これに接近する。

長安に遷都して長期戦に備える董卓を警戒し、誰もが洛陽を攻めめぐねる中、曹操は洛陽へ進撃する。滎陽縣の汴水で董卓の中間將徐栄と会戦、衛茲・鮑輅を含む多数の死者を出して敗退した。曹操は酸棗に戻り、董卓打倒を主張するが、董卓の放棄した関東の分配に関心が移っている諸將は黙殺した。曹操は失望して揚州へ赴き丹楊兵を招募するが失敗、袁紹軍に合流した。漢のために挙兵しながら、董卓と戦わなかつた袁紹らに対して、敗戦とはいえ滎陽で戦い、董卓打倒を主張した曹操の行動は、こののち獻帝を擁立する大義名分となり、漢の護持を掲げる「名士」にその存在を注目させることになる。

初平二（一九一）年まで、曹操は袁紹の陣営にあつた。この間、袁紹は盟主の地位を利用して冀州を奪うなど、河北の制庄に向け着々と進んでいた。鮑信はこれを見て、『三國志』卷十二 鮑勛傳注引『魏書』に、今（袁）紹、盟主と爲り、權に因り利を専らにし、將に自ら亂を生ぜんとす。是れ復た一つの（董）卓有るなり。若し之を抑へんとすれば、則ち力、制する能はず。祇だ以て難に遭ひ、又何ぞ能く濟はん。且に大河の南を規る可く、以て其の變を待たんとす」と。太祖（曹操）之を善しとす。太祖、東郡太守と爲り、信を表して濟北相と爲す。

と主張、袁紹の勢力に対抗すべく、河南を攻略することを説いた。曹操は黄巾、中でも于毒らが率いる黒山の賊と戦うために東郡へと向かう。そのころ、青州の黄巾は黒山との合流を目指し、冀州の渤海郡に侵入したが、公孫瓚に撃破されていた。その残存勢力は兗州に向かい、任城相鄭遂を破り東平國に侵入、迎撃した兗州刺史劉岱を殺害した。

『三國志』卷一 武帝紀注引『世語』に、

(陳) 宮、別駕・治中に曰く、「今、天下分裂して州に主無し。曹東郡、命世の才なり。若し迎へて以て州を牧せしめば、必ずや生民を寧んぜん」と。鮑信らも亦、之に然りと謂ふ。

とあるように、東郡の「名士」陳宮は、鮑信らとともに、兗州の別駕從事・治中從事を説得し、曹操を州牧として受け入れることを定めた。曹操の兗州支配は、兗州「名士」である陳登及び鮑信の規制力に依拠していたのである。

兗州牧となった曹操は、青州黄巾と激しく戦い、鮑信を失ってしまふ。その後、黄巾を濟北に追い詰め、戦士三十万・非戦闘員百万を降伏させ、この中から精鋭を集め「青州兵」を組織した(『三國志』卷一 武帝紀)。青州兵は曹操の直接的な軍事基盤となり、曹操軍の中核として、以後の覇権を支えていく。曹操直属軍である青州兵は特権意識を持ち、友軍を略奪するなどの横暴を行い、于禁と対立するほどであった。曹操は、青州兵の横暴を見過ごさなかった于禁の対応を称賛し、青州兵を庇い立てしなかった(『三國志』卷十七 于禁傳)。青州兵と同質の直属軍である「東州兵」を持つ劉焉・劉璋政権は、東州兵の横暴を容認して政権を崩壊させた(渡邊一九八九一a)。曹操集団では、軍隊への適切な統御がなされたと見えよう。

『三國志』に専傳を持つ曹魏政権の構成員をまとめた表一「曹魏政権の人的構成」に示したように、曹操の勢力伸長過程は四期に分類できる。すなわち、I期、挙兵から兗州支配まで(一八九年～一九五年)、II期、獻帝擁立から呂布・袁術の打倒まで(一九六～一九九年)、III期、官渡の戦いから袁氏滅亡まで(二〇〇～二〇七年)、IV期、荊州

進入から死去まで（二〇八〜二二〇年）の四期である。I期の家臣団には、挙兵以来曹操を支えた武将が含まれる。これらの武将への曹操の信任は厚く、典韋・許褚という二人の親衛隊長が含まれるほか、樂進・李典・于禁・徐晃はいずれも曹魏の名将となった。II期には、呂布・袁術を打倒したため、張遼・臧覇など呂布配下の將軍や、袁術支配下の揚州人士が集団に参入した。中でも張遼は、のち曹魏を代表する名将となつていく。ゆえに、順調に旧敵対勢力の曹操集団への参入が果たされたように思われがちだが、張繡は降伏後に反乱を起こしている（『三國志』卷八 張繡傳）。張繡を支えた「名士」賈詡に翻弄された曹繡は、「名士」を集団に取り込む必要性を一層強く感じたであろう。III期には、袁紹勢力を打倒して、張郃などの武将や黒山の賊張燕といった親袁紹派軍閥を吸収し、またIV期には、文聘ら劉表の武将と馬超・張魯の配下が参入した。この時期になると曹操は、すでに磐石な軍事基盤を確立しており、III・IV期の武将の加入により、曹操集団が動揺することはなかった。これら野戦型將軍は、一万を超える兵力を掌握することは少なく、曹操期の方面軍司令官は、ほとんど一族・親族で占められていた。また、李典が同族と配下の者一万三千人余を乘氏から鄴に遷すことを願ひ出て、曹操に歓迎されたように（『三國志』卷十八 李典傳）、將軍と配下の兵力とが個人的に結びつき、地方で割拠することは警戒されていた。曹操は武将もまた見事に統御し得たと言えよう。

曹操は、一族・親族の將軍と青州兵という軍事的基盤を確立していたため、平定した各群雄の將軍や降伏・随従した自立勢力を自由に統御することができたのである。そのため、劉備と関羽・張飛のような「義兄弟」的結合関係や（渡邊一九八八）、孫権が呂蒙や凌統に見せた深い恩愛関係を（渡邊一九九九）、曹操とその配下の武将に見いだすことは難しい。かろうじて、挙兵地に本貫を持つ典韋、及び同郷の許褚という二人の親衛隊長との間に片鱗を見ることができようか。いずれにしても、『孫子』研究の第一人者の面目躍如たる曹操の武将統御術であった。

兗州牧として拠点を保ち、青州兵を支配下に収め、順調に勢力を拡大していた曹操は、一転して最大の危機を迎える。徐州大虐殺に「名士」が反発したのである。曹操の父曹嵩は、泰山郡の華縣に戦乱を避けていた。根拠地を定めた曹操は、泰山太守應劭に父を送り届けるよう命じた。しかし、徐州牧陶謙が密かに派遣した数千騎の襲撃をうけ、一行は皆殺しにされた(『三國志』卷一 武帝紀注引『世語』)。陶謙は袁術派の公孫瓚と結び、袁紹と冀州領有を争っていた。石井(二〇〇〇)は、曹嵩襲撃を袁紹派の曹操への挑発と捉える。首肯すべき見解である。曹操はこれに報復した。徐州大虐殺である。曹操は単に徐州牧陶謙を攻撃するだけではなく、数十万に及ぶ一般民衆の皆殺しをも謀ったのである。これを避けて徐州からは、笮融・諸葛瑾・嚴俊など多くの人士が江東に避難した。徐州からの北来「名士」を吸収した孫呉は、それを政治的基盤の一つとして政権を樹立する(渡邊一九九九)。孫權陣営は曹操を「豺虎」と評し、魯肅・諸葛亮は曹操を暴虐な項羽に準えた。両者の反曹操感情は、やがて呉蜀同盟・三國鼎立として、曹操に立ちほだかる。対外的影響だけに止まらない。『三國志』卷六 袁紹傳注引『魏氏春秋』には、袁紹が曹操を弾劾した檄文を載せ、

故の九江太守の邊讓、英才俊逸たり。天下名を知る。直言・正色、阿諂せざるを以て、身首は梟縣の戮を被り、妻孥は灰滅の咎を受く。是れより士林は憤痛し、民怨は彌々重し。一夫臂を奮ひ、州を擧げ聲を同じくし、故に躬は徐方に破れ、地は呂布に奪はれ、東裔を彷徨し、蹈據するに所無し。

と伝える。兗州陳留の「名士」邊讓は、郭泰に評価された兗州を代表する「名士」であった(『後漢書』列傳五十八 郭泰傳)。曹操は、徐州大虐殺に動揺する兗州「名士」に対する權威の確立をあせり、反発していた邊讓を殺害して威を示したのである。完全な逆効果であった。第二次徐州遠征の隙を衝き、張邈・陳宮が呂布を引き入れて叛乱を起こしたのである。ここまで、曹操を支えてきた衛茲・鮑信とともに兗州「名士」であったが、すでに亡い。そうした

中で州の輿論を固め、曹操を兗州牧に迎えた兗州「名士」の陳宮が背いたのである。兗州を失うのは時間の問題と思われた。

この危機を救った者が荀彧である。兗州東郡の「名士」程昱の「民の望」に依拠しながら、荀彧は本拠地鄆城のほか、范城・東阿の二縣を死守したのである。曹操は急遽帰還し、袁紹の支持を受けつつ、一年余をかけ兗州を回復、正式に兗州牧となった。曹操は程昱に、「子の力微かりせば、吾歸する所無し」(『三國志』卷十四 程昱傳)と、程昱が兗州「名士」としての規制力を發揮し、拠点を死守したことを感謝したが、それで兗州の支配が確立したわけではない。表一「曹魏政権の人的構成」に掲げた曹魏の有傳者九九名の中、兗州出身者は一七名を占めるが、徐州出身者は五名に過ぎない。実は兗州出身者も「名士」は六名に過ぎない。呂布の打倒にも拘らず、兗州の支配は決して安定してはいない。徐州に至っては、曹操の支配領域に入った後にも、「泰山の諸將」と呼ばれる臧霸らにその支配を委ねるほどであった(方詩銘一九八九)。大虐殺への激しい恨みに直接支配など行い得なかつたのであろう。曹操は新たな拠点を求めざるを得ない。それが豫州潁川郡であった。

四、荀彧の加入と潁川「名士」

荀彧は豫州潁川郡潁陰縣出身の「名士」である。荀彧の集団加入の意義は、かつて渡邊(一九九五)で検討した。すなわち、曹操は荀彧封侯の上奏文において、荀彧の功績として①「匡弼」②「舉人」③「建計」④「密謀」を挙げた。①「匡弼」は政治全般の輔佐、②「舉人」は人材登用、③「建計」は長期計画の立案、具体的には獻帝の擁立、④「密謀」は情報分析に基づく戦略・策略、具体的には対袁紹戦の分析であった。いずれも大きな意義があるが、問題を徐州大虐殺直後の危機的状況下に限定すると、②・③が取り分け重要な意味を持つ。②「舉人」から検討しよ

う。

曹操は汝南「名士」社会の一員であった。ところが、表一「曹魏政権の人的構成」に含まれる汝南郡出身者は、和洽だけである。和洽は荊州を名声の場とする「名士」であり（渡邊一九八八）、純粹な意味での汝南「名士」ではない。万（一九六四）の「汝穎集団」論は、曹操集団における汝南と穎川の重要性を同列に扱う点において、実証的に破綻しているのである。許劭に評価された汝南「名士」の曹操に、なぜ汝南人士は出仕しなかったのであろうか。もちろん、曹操が汝南郡を本貫とする袁紹に敗れたのである。『三國志』卷二十三 和洽傳に、袁紹は冀州に在り、使を遣はして汝南の士大夫を迎へしむ。

とあるように、袁紹は冀州牧となった際に、汝南の「名士」を迎えている。汝南「名士」は、多く袁紹に出仕したのである。たとえ出仕しなくとも、『三國志』卷二十六 滿寵傳に、

時に袁紹は河朔に盛んなれども、汝南は紹の本郡なれば、門生・賓客布く諸縣に在りて、兵を擁して拒守す。太祖之を憂へ、（滿）寵を以て汝南太守と爲す。寵其の服従せし者五百人を募り、率いて二十餘壁を攻め下し、其の未だ降らざる渠帥を誘ひ、坐上に於て十餘人を殺し、一時に皆平らぐ。戸二萬・兵二千人を得、田業に就かしむ。

とあるように、官渡の戦いの際、すでに曹操の支配領域に含まれているはずの汝南郡では、曹操に抵抗して「壁」に依る袁紹の「門生・賓客」の武力闘争が行われていたのである。それを鎮圧した滿寵は、「戸二萬・兵二千人を得」というから、その勢力の大きさを理解できよう。これでは曹操が、汝南「名士」社会に名声を持っていても仕方ない。

汝南郡と並称される穎川郡には、曹操は直接的な名声を有さない。そこに、穎川「名士」の中核である荀彧が加入したのだ。荀彧加入の第一の意義は、穎川郡を曹操の拠点となし得たことにある。荀彧の祖父荀淑は、李固・陳蕃・

李膺・王暢と交友し、杜喬・房植により賢良方正に挙げられた。叔父の荀爽は、李膺・賈彪・許劭・郭泰と交友している(『三國志』卷十 荀彧傳注引『續漢書』)。「潁川の荀氏」は、図一「後漢末の「名士」と三國政權」にも表したように、後漢末の「名士」本流であった。潁川郡における規制力は圧倒的である。ただし、父の荀綝は宦官唐衡の娘を荀彧に娶ったことを非難されている。荀彧もまた評価を落とした。それにも拘らず、荀彧は何顧から「王佐の才」という評価を受けるほど個人的にも卓越した才能を持つ「名士」なのであった。荀彧は、はじめ兄の荀諶・辛評・郭図らとともに袁紹に仕えた。しかし、荀彧は袁紹を「大事を成すこと能はず」と判断し、曹操集団へ参入する。曹操は「吾の子房なり」と、張良に準えて荀彧の加入を喜んだ(『三國志』卷十 荀彧傳)。荀彧の能力に加えて、潁州潁川郡を拠点とするためには、「潁川の荀氏」の名望が不可欠だからである。曹操の経済的基盤として著名な屯田制も、潁川郡の安定的な支配が前提であった。呂布との戦いの中で、東阿令棗祗が屯田により軍糧を備蓄したことを始まりとする屯田制は、潁川郡許縣付近の「汝南・潁川黄巾」を降伏させ、その資材に依拠しながら制度化されたものであった。

また、荀彧が推挙した人物は、一代の英才ばかりであった。『三國志』卷十 荀彧傳注引『彧別傳』に、(荀彧の)前後擧ぐる所の者は、命世の大才なり。邦邑は則ち荀攸・鍾繇・陳羣、海内は則ち司馬宣王、及び當世の知名郝慮・華歆・王朗・荀悦・杜襲・辛豐・趙儼の儔を引致し、終に卿相と爲るもの、十數人を以てするなり。士を取るには一揆を以てせず、戲志才・郭嘉らは負俗の譏有り、杜畿は簡傲にして文少なきも、皆智策を以て之を擧げ、終に各々名を顯す。

とあるように、荀彧は曹操集団への「名士」の参入に決定的な役割を果たしたのである。表一「曹魏政權の人的構成」の彧の項目には、荀彧の一族・親族を◎、彧の推挙を受けた者を○、彧との評価・交友關係を△で表記してい

る。Ⅰ期の「名士」五名中三名、Ⅱ期の「名士」一八名中六名、Ⅲ期の「名士」二〇名中五名に荀彧との関わりが見られることは、荀彧の交友関係の広さを裏付ける。多くの「名士」を参加させた荀彧は、曹魏政権の支配を安定させたのである。

荀彧加入の意義について③「建計」、すなわち獻帝の擁立も検討しよう。朝廷は迷走していた。董卓を打倒した王允は敗れ、李傕・郭汜・樊稠・張濟の四頭政治が洛陽に遷都し、その後は張楊・董承・楊奉・韓暉の四頭政治が続いていた。荀彧の規制力により潁川郡を固めた曹操は、張楊を通じて使者を派遣、董昭の口添えもあり獻帝を迎えることに成功する。長安でも鍾繇が李傕らを説得していた。こうして獻帝を迎えた曹操は洛陽を制圧、司隸校尉・録尚書事となり、のち司空・車騎將軍を兼任する。司空府は霸府となったのである（石井二〇〇〇）。

獻帝の擁立は、「名士」の支持を回復する「切り札」であった。ただし、この切り札は二面性を持つ。一方で、獻帝の名により他の群雄に命令を下し得るとともに、「漢」の復興を大義とする「名士」の支持を回復し得るという、曹操にとって有利な側面を持つ。荀彧はこれを理由に獻帝の擁立を勧めた。しかし他方では、曹操の行動を制限する切り札ともなり得る。曹操は、これ以後「漢」を背負って勢力を拡大するため、漢室復興を掲げ続けなければならぬ。端的に言えば漢を滅ぼせないのである。荀彧はこれを目指したのである。曹操は、二面性を持つ切り札をあえて身にまとった。徐州大虐殺への「名士」の反発は、それほどまでに大きかったのだ。また、潁川郡許縣に根拠地を置く以上、潁川「名士」荀彧の「建計」には従わざるを得ない。荀彧の存在は、徐州大虐殺後の曹操の方向性を決定したのである。

おわりに

曹操は宦官の養子の子であるが、従来言われていたように、「名士」と対立しながら個人の実力によって抬頭したわけではない。祖父曹騰は中央官界に幅広い人的関係を持ち、曹操はそれを利用しながら「名士」社会に参入することにより、政界に進出できたのである。群雄となつてからの曹操の基盤は、軍事的には青州黄巾を集団に参入させた青州兵と一族・宗族を中核とする方面軍司令官の運用であり、経済的には屯田制であつた。

荀彧の加入は、かかる基盤を持つ曹操に潁川「名士」を参入させる端緒となつた。潁川・汝南という後漢末における「黨人」の、そして「名士」の中心地域のうち、汝南郡はそれを本郡とする袁紹の基盤であつた。曹操が、許劭の人物評価により参入した「名士」社会は汝南郡のそれであつたが、ここでは曹操の名声は袁紹に及ばず、汝南郡は曹操の基盤とはならなかつたのである。

後漢末から三国にかけての知識人層は、「清流豪族」や「汝潁集団」として、等し並みに把握できるものではない。「名士」は地域的な偏差や特徴を持つて存在していた。それでは、曹操の基盤となつた潁川「名士」はいかなる特徴を有したのであろうか。この課題については、稿を改めて論ずることにしたい。

〔注〕

(一) このほか好並(一九五七—b)で反魏叛乱の分析を行い、好並(一九七〇)では農民叛乱の性格を関連づけて、曹魏を小農民自立化の傾向に対応し得た王朝であると見た。

(二) 「共同体」論争に関しては、堀(一九七〇)・五井(一九七四)・多田(一九八二)などの「豪族共同体論」批判があり、谷川(一九八七)はそれらへの反論を集大成したものである。

(三) このほか越智重明(一九七四)は、曹操の政策と係わらせながら政権の分析を行い、神矢法子(一九七四)

は、制度面から曹魏の人才主義を追求する。また、丹羽悦子（一九七三）は、当該時期までの曹操政権論を総括したものである。

（四）章映閣（一九八九）・方詩銘（一九九五）は中国を代表する曹操論であり、日本には川合康三（一九八六）・竹田晃（一九七三）・石井仁（二〇〇〇）がある。

（五）曹操の家臣団への態度は、唯才主義と称されるが、王定璋（一九八六）は、曹操が唯才主義により賢能の士を求め、一方で自己への敵対者を容赦なく殺害したと説き、馬植傑（一九八八）は、曹操の人材登用は、敵対者優遇・忠孝の重視・謀臣の策を奪わない・臣下の反対意見を尊重する・適材適所である点において優れていたとする。また、朱子彦（一九八七）は、曹操の唯才主義は、後漢末の門閥主義を打破したが、それは戦乱時の権宜の策として遂行された典型的な権謀術数主義であったとする。曹操の家臣団の地域性に関して孟繁治（一九九四）は、曹操政権内における潁川郡出身者の役割の大きさに注目している。

（六）「黨人」の自律的秩序の表現である人物評価、その集大成である「三君八俊」では、外戚・宗室に続く三君の末席に陳蕃が、八俊の筆頭に李膺が置かれ、「黨人」の中心が汝南郡の陳蕃、それに次ぐ者が潁川郡の李膺であったことが分かる。「黨人」の中心地は汝南と潁川、より上位が汝南郡であった（渡邊一九九一-a）。

（七）石井（二〇〇〇）に依れば、袁紹の推挙によるという。曹操が袁紹の庇護下にあった時期の長かったことについては方詩銘（一九八七）に指摘がある。西園八校尉の軍事史的意義については、石井（一九九六）を参照。

（八）『三國志』巻一 武帝紀に「呂」布出兵戦、先以騎犯青州兵。青州兵奔、太祖陳亂」とあるように、青州兵は曹操軍に組み込まれた後も、呂布から見て一目で分かるような集団として維持され、また青州兵が崩れると曹操の陣が動揺したように、軍の中核となっていたことが分かる。集団として維持されたことに関しては、青州兵と曹操との

間に何らかの約束があったとする大淵（一九九一）がある。また、曹操の覇権確立の上での青州兵の重要性については、片倉（一九六九）を参照。

（九）曹操には従順であった青州兵であるが、曹操が卒して曹丕が即位すると、『三國志』卷十八 臧霸傳注引『魏略』に、「會太祖崩、（臧）霸所部及青州兵、以為天下將亂、皆鳴鼓擅去。文帝即位、以曹休都督青・徐、霸謂休曰、「國家未肯聽霸耳。若假霸步騎萬人、必能橫行江表」。休言之於帝、帝疑霸軍前擅去、今意壯乃爾。遂東巡、因霸來朝而奪其兵」と曹丕の命には従わず、青州兵は曹操の死去を機に政権を離脱した。曹丕は、それと関係を持つと見られる臧霸の軍権を取りあげ、これに対処したが、青州兵が曹操と特殊な関係を有していたことを理解できよう。

（一〇）曹魏の方面軍司令官の特徴は、曹操期・文帝期における宗室・親族の多さと、文帝期の司馬懿・陳羣を皮切りに司馬氏を中核とした「名士」層が方面軍司令官に就官し始め、曹爽を司馬懿が打倒した後には曹氏の就官が無く、夏侯玄などの残存勢力も司馬氏に駆逐されたことにある。ここに魏晉革命に向けた司馬氏の権力確立過程を見ることが出来る。司馬氏と関わりなく方面軍司令官となった「名士」の王淩や諸葛誕が、やがて司馬氏に追い詰められ反乱を起こしたことも同質の動向である。高貴郷公期以降には、方面軍司令官は、司馬氏とその一派が専有し、司馬氏を中核とする「名士」が軍事権の掌握をも背景としながら、曹魏政権を打倒したことを理解できるのである。石井仁（一九九〇、九一、九二、九三）、森本淳（一九九八）を参照。

（一一）渡邊（一九九一―b）で論じたように、『三國志』卷十四 程昱傳に、「荀）彧謂（程）昱曰、今兗州反、唯有此三城。（陳）宮等以重兵臨之、非有以深結其心、三城必動。君、民之望也、歸而說之、殆可。昱乃歸、過范、說其令斬允曰……允流涕曰、不敢有二心。……昱至東阿、東阿令棗祗已率厲吏民、拒城堅守。又兗州從事薛悌與昱協謀、卒完三城、以待太祖」とある「民の望」は川勝（一九七〇）の説くが如き一般民衆の輿論ではない。程昱は東阿

県の豪族薛氏らに規制力を及ぼし三城を守り通したのである。

(一二) 唐衡は当初、汝南郡の傅公明に娘を嫁がせようとしたが断られたので、荀彧に白羽の矢を立てた(『三國志』卷十 荀彧傳注引『典略』)。宦官ですら婚姻関係を結びたい「名士」社会の中心は、まず汝南郡、続いて潁川郡なのである。また、荀彧個人としては、汝南郡の傅公明が拒否したため、自分にお鉢が廻ってきたわけで、汝南を本郡とする袁紹集団を見限った理由の一つに、汝南郡への反発があったのかも知れない。荀彧の多くの挙人の中に、汝南郡出身者は一人も含まれない。汝南郡と潁川郡のせめぎあいについては、勝村哲也(二九七〇)を参照。(二三) 屯田制については、西嶋定生(一九五六)・藤家礼之助(一九六二)・伊藤敏雄(一九八四)などを参照。

〔 文献表 〕

- 石井 仁「曹魏の護軍について」(『日本文化研究所研究報告』二六、一九九〇年)。
 石井 仁「軍師考」(『日本文化研究所研究報告』二七、一九九一年)。
 石井 仁「都督考」(『東洋史研究』五一―三、一九九二年)。
 石井 仁「四征將軍の成立をめぐって」(『古代文化』四五―一〇、一九九三年)。
 石井 仁「無上將軍と西園軍―後漢靈帝時代の『軍制改革』」(『集刊東洋学』七六、一九九六年)。
 石井 仁『曹操 魏の武帝』(新人物往来社、二〇〇〇年)。
 伊藤敏雄「曹魏屯田と水利事業」(『佐藤博士退官記念 中国水利史論叢』国書刊行会、一九八四年)。
 大淵忍爾『初期の道教―道教史の研究 其の一』(創文社、一九九一年)。
 越智重明「魏王朝と土人」(『史淵』一一一、一九七四年、『魏晋南朝の貴族制』研文出版、一九八二年に改題のうえ

所収)。

片倉 穰「曹魏政権の成立過程」(『歴史教育』一七二三、一九六九年)。

勝村哲也「後漢における知識人の地方差と自律性」(『中国中世史研究一六朝隋唐の社会と文化』東海大学出版会、一九七〇年)。

神矢法子「魏前期の人才主義」(『九州大学東洋史論集』三、一九七四年)。

川合康三「曹操」(集英社、一九八六年)。

川勝義雄「シナ中世貴族政治の成立について」(『史林』三三一四、一九五〇年、『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年に改題のうえ所収)。

川勝義雄「曹操軍団の構成について」(『京都大学人文科学研究所創立廿五周年記念論文集』京都大学人文科学研究所、一九五四年、『六朝貴族制社会の研究』所収)。

川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」(『東洋史研究』二五一四、一九六七年、『六朝貴族制社会の研究』所収)。

川勝義雄「貴族制社会の成立」(『岩波講座 世界歴史』五、一九七〇年、『六朝貴族制社会の研究』所収)。

五井直弘「曹操政権の性格について」(『歴史学研究』一九五、一九五六年)。

五井直弘「中国古代史と共同体一谷川道雄氏の所論をめぐって」(『歴史評論』二八五、一九七四年)。

重田 徳「中国封建制研究の方向と方法」(『歴史評論』二四七、一九七一年)。

竹田 晃『曹操一その行動と文学』(評論社、一九七三年)。

多田狷介「後漢後期の政局をめぐって一外戚・宦官・清流士人」(『東京教育大学文学部紀要』七六 史学研究、一九七〇年、『漢魏晋史の研究』汲古書院、一九九九年に所収)。

多田狷介「中国古代史研究覚書」（『史艸』一二、一九七一年、『漢魏晋史の研究』所収）。

多田狷介「東アジアにおける国家と共同体」（『現代歴史学の成果と課題』Ⅱ-2、一九八二年、『漢魏晋史の研究』所収）。

谷川道雄『中国中世社会と共同体』（国書刊行会、一九七六年）。

谷川道雄『中国中世の探求－歴史と人間』（日本エディタースクール、一九八七年）。

内藤湖南「概括的唐宋時代観」（『歴史と地理』九一五、一九三二年）。

中村圭爾『郷里』の論理」（『東洋史研究』四一一、一九八二年、『六朝貴族制研究』風間書房、一九八七年に所収）。

西嶋定生「魏の屯田制－特にその廃止問題をめぐって」（『東洋文化研究所紀要』一〇、一九五六年）。

丹羽允子「曹操政権論ノート」（『名古屋大学東洋史研究報告』二、一九七三年）。

藤家礼之助「曹魏の屯田制」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』八、一九六二年、『漢三國兩晉南朝の田制と税制』東海大学出版会、一九八九年に所収）。

堀 敏一「九品中正制度の成立をめぐって－魏晉の貴族制社会にかんする一考察」（『東洋文化研究所紀要』四五、一九六八年）。

堀 敏一「中国古代史と共同体の問題」（『駿台史学』二七、一九七〇年、『現代歴史学の成果と課題』上 青木書店、一九七一年に再録）。

堀 敏一「曹操政権と豪族」（『明治大学人文科学研究所紀要』三九、一九九六年）。

増淵龍夫「後漢黨錮事件の史評について」（『橋論叢』四四一六、一九六〇年、『新版 中国古代の社会と国家』岩波

書店、一九九六年に所収)。

森本 淳 「曹魏軍制前史－曹操集團拡大過程からみた一考察」(『アジア史研究』二二、一九九八年)。

矢野主税 『門閥社会成立史』(国書刊行会、一九七六年－a)。

矢野主税 「魏・呉・蜀の政治的社会的独自性について」(『長崎大学教育学部社会科学論叢』二五、一九七六年－b)。

吉川忠夫 「范曄と後漢末期」(『古代学』一三一・三・四、一九六七年、『六朝精神史研究』同朋舎出版、一九八四年に所収)。

好並隆司 「曹操の時代」(『歴史学研究』二〇七、一九五七年－a)。

好並隆司 「魏王朝成立過程試論」(『社会科学教育 歴史・地理研究論集』一九五七年－b)。

好並隆司 「曹操政権論」(『岩波講座世界歴史』五、一九七〇年)。

渡邊義浩 「蜀漢政権の成立と荊州人士」(『東洋史論』六、一九八八年)。

渡邊義浩 「蜀漢政権の支配と益州人士」(『史境』一八、一九八九年－a)。

渡邊義浩 「後漢時代の宦官について」(『史峯』三、一九八九年－b、『後漢国家の支配と儒教』雄山閣出版、一九九五年に改題のうえ所収)。

渡邊義浩 「後漢時代の党錮について」(『史峯』六、一九九一年－a、『後漢国家の支配と儒教』に改題のうえ所収)。

渡邊義浩 「漢魏交替期の社会」(『歴史学研究』六二六、一九九一年－b)。

渡邊義浩 「『徳治』から『寛治』へ」(『中国史における教と国家』雄山閣出版、一九九四年、『後漢国家の支配と儒

教」に改題のうえ所収)。

渡邊義浩 「三国時代における『文学』の政治的宣揚—六朝貴族制形成史の視点から」(『東洋史研究』五四—三、一九九五年)。

渡邊義浩 「三国政権形成前史—袁紹と公孫瓚」(『吉田寅先生古稀記念 アジア史論集』東京法令出版、一九九七年)。

渡邊義浩 「孫呉政権の形成」(『大東文化大学漢学会誌』三八、一九九九年)。

方 詩銘 「曹操起家与袁曹政治集团」(『學術月刊』一九八七—二、一九八七年、『曹操・袁紹・黄巾』所収)。

方 詩銘 “泰山諸將”与“泰山賊”、“泰山兵”—論東漢末年臧霸等人起兵的性質」(『史林』一九八九—二、一九八九年、『曹操・袁紹・黄巾』所収)。

方 詩銘 『曹操・袁紹・黄巾』(上海社会科学院出版社、一九九五年)。

郭 沫若 「談蔡文姬的《胡笳十八拍》」(『蔡文姬』文物出版社、一九五九年、『曹操論集』三聯書店、一九六〇年に所収)。

馬 植傑 「論曹操用人及其有關問題」(『蘭州大学学报』社会科学版 一九八八—二、一九八八年、『三国史』人民出版社、一九九三年に改題のうえ所収)。

孟 繁治 「潁川謀士群体与曹操政権」(『鄭州大学学报』哲学社会科学版 一九九四—六、一九九四年)。

唐 長孺 「東漢末期的大姓名士」(『中華學術論文集』中華書局、一九八一年、『魏晉南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年に所収)。

万 繩楠 「曹魏政治派別の分野及其升降」(『歴史教学』一九六四—一、『魏晉南北朝史論稿』安徽教育出版社、一九

八三年に改定のうえ所収。

- 王 定璋 「曹操対謀臣的態度」(『社会科学』(蘭州)一九八六一四、一九八六年)。
張 大可 『三国史研究』(甘肅人民出版社、一九八八年)。
章 映閣 『曹操新伝』(上海人民出版社、一九八九年)。
朱 子彦 「曹操用人政策的再評価」(『人文雑誌』一九八七一五、一九八七年)。